

幼児の描画指導について

米 原 智

Tomo YONEHARA : How to Teach Painting to Little Children

I はじめに

昭和47年7月第10回中国5県造形教育研究大会が松江市で開催された。そのうちの行事の一つとして、幼児、児童、生徒の作品を県立博物館で展示したところ、大変な盛況で観客で会場がいっぱいになった。以前は小・中学校の先生が、児童、生徒を引卒して会場を訪れ、にぎわっていたが、本会の観客はそれと違って、親子づれが目立って多かった。このように観客が変わってきたことや会場の雰囲気からして、一般の人々が幼児の絵に関心をもってきたことがうかがえる。本会の大会講師として来松された東京学芸大学名教授倉田三郎氏も会場にこられ、感想を述べておられた。その中で「今世界で一番幼児期の美術教育が進んでいるのは英国であるが、その英国の幼児の絵と大変よく似ている。」ということであった。関心がだんだんと高まるとともに、レベルも向上しつつあることを意味し、有意義な会であった。

しかしながらその反面教育の場では、急激な時代の推移の中で、なにをどのように指導していったらよいのか混沌としてきたことも事実である。言語の世界では「変身」というような新語が生まれ、子どもたちの間ではごく普通にあつかわれている。描画の題材にしても、自由表現をさせると、怪獣やロボット等、時代の流行を反映して、かなり積極的にとび出してくる。そしてこのような題材が何回となく繰返されて描かれ、知識から入った一つのパターンとして根強い壁となっている。幼児たちのほんとうの心のささやきや、おどろきといったものが、ごく自然の姿で生き生きと語られるのは、どのような指導が必要であろうか。

最近幼稚園・保育所等の現場に出かける機会が多くなってきた。その席上でよく問題になるのは、子どもたちの家庭でのくらしということである。テレビの普及により、都市・地方にかかわらず、子どもたちがテレビを見る時間はだんだんと多くなり、それに反して絵本を見る機会はしだいに減っている。また、毎日同じような生活の繰返して、積極的な遊びが少なく、変化のあるくらしが望まれているようである。

私は松江市城山の裏手に住んでおり、城山の中を歩く機会がよくある。急な坂道や石垣の上などに、クルミの木があつて、枝をのばしている。秋になつて実が熟す頃になると、どこからともなく近所の子どもたちが実の下に集まり、危険をおかしてその実を持ち去つてゆく。葉が黄色くなる頃には、クルミの実はいつとはなしに姿が見えなくなったものである。ところが最

近になって、クルミの枝を寒風が吹き抜けるようになって、クルミの実が姿を消さないということである。城山のあちこちに「公園の樹木を大切にしましょう。」と書いた標木が立っている。近頃の子どもたちは行ないが上品になって、公園のエチケットを守るようになったのだと、あまり気にもとめていなかった。

ある日子どもたちにそのことを話してみたら、次のような答えであった。「あんな危いまねをして手に入れなくても、デパートでお金を出せばいくらでも買える。」ということである。この一言はいろいろな意味をもっていると思うが、現代の子どもたちの考え方や、くらしがよくわかる気がする。苦勞をして手に入れた一個の実は、この子にとっては宝であり、無限に広がってゆく夢がある。それがお金で手に入れた一個の実は、ただそれだけの価値しかあり得ない。このように素朴な感動はだんだんと合理的になって無気力さになってゆく。

また、椿の頃になると、城山椿谷は椿の花でいっぱい、一雨降ると地面に花びらが散り敷いて美しい。近所の子どもたちは、笹の小枝に散った椿の花をつらねて、なににするというのではなく、集めて遊んだものである。それが家の軒下等に吊してある様を見ると、ほのぼのとした叙情を感じると共に、生きたデザイン遊びだとよく思った。今頃の花は踏みにじられ、色あせて地面の中に消えてゆく。このことは城山の近辺でおこるほんの一例だが、現代の子どもたちの生活の中には、素朴な遊びが少なく、ものや事象に対するなまの感動が乏しい。このような生活の中から、どのようにしたら生き生きと描画表現をしてくれるか、もう一度指導領域を見なおして、子どもたちへの勇気づけをする必要がある。

II 指導のための領域について

幼稚園の子どもたちは未分化であるし、さまざまな生活経験をもっている。であるから以下あげる項目は、別々に孤立するものではなく、関連して取扱われるべきものである。指導領域の底辺は、いろいろあると思われるが、大きくわけて5項目の指導領域としたい。

- | | | |
|---|-------------|---|
| 1 | くらしをかく | 経験したことを思い出してかく。 |
| 2 | よくみてかく | ・目の前にもものをおいてよく観察してかく。
・よく観察してからかく。 |
| 3 | おはなしをかく | ・物語、童話といった文学性のあるお話をかく。
・子どもたちが興味をよびそうなお話をかく。 |
| 4 | 夢、空想をかく | 豊かな幻想の世界をかく。 |
| 5 | きもちのたかぶりをかく | 特殊な感情表現である。 |

1 くらしをかく。

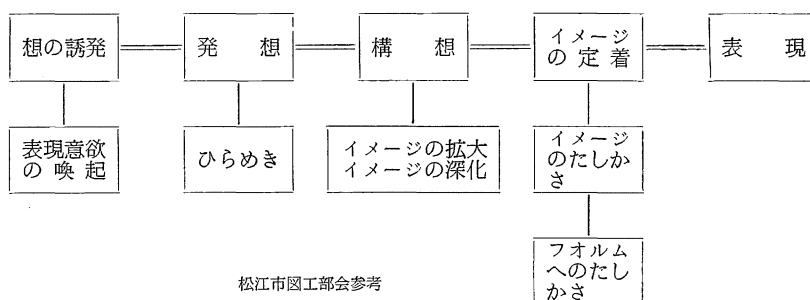
今までに子どもたちが、経験したことを思い出してかく領域で、見たり、経験したことのないうことがらはかけない。また、経験したことがらでも、強く印象づけられることが必要で、た

いがいの過去のできごとは、心の片隅にねむっていることが普通である。前述したように、くらしの中に感動が乏しく、心の中に育ってゆく夢がないので、すぐ描画表現に結びつかない。

以前の子どもたちは、それぞれ積極的な遊びがあり、松江の子どもたちは、恵まれた遊び場をもっていた。城山の森は勿論のこと、グラウンドや、掘り端、ひいては近郊の田んぼと、よく遊んでいる子どもを見かけたものだ。

この頃の描画指導の流れは、発想からの研究が重要な課題で、発想のさせ方いかんによって、大きくその結果が左右されていた。このことを一本の豆のの木にたとえるならば、地面に種を蒔けばやがて芽が出る。双葉を病虫害から守ったり、支柱を立てたりして姿を整え、実を結ばせてゆく。このような作業が指導の流れであると思われていた。

ところが最近になって、種を蒔いてもものびのびとした芽を出してくれない。支柱を立てようとしても、伸びてくれない。これでは美術教育としての、根本的ななにかが欠けているのではないか、つまり土壌がこう着して発芽させる力をもたないのである。であるから、種を蒔く以前、発想以前の、地面の掘り起こしからしなければならぬという、大変手数のかかる指導の流れになった。つまりこれを想の誘発という。この一連の流れを図示すれば、下記のような。



想の誘発とは——今まで無意識のうちに経験していたことがらや、対象とのつながりが弱くて、心の中に眠っている潜在意識を、もう一度意識の上へのぼらせることである。このためには、経験したことを再現させたり、新たに経験させることで、表現意欲を喚起することである。

発想とは——ある目的や、条件を達成するための考えを生みだす、心のひらめきである。発想の瞬間は、頭や心の中で経験した、知識、感情、感覚や、潜在意識などが、総合的にからみ合い、お互に交叉したり、反発したり、融合したり、整理されたりしている間に、一つの想が醸造され、こうありたいという心の一点と接触して、忽然として生まれるものである。

大人の場合であれば、この発想がスムーズにおこなわれたり、逆に時間がかかったり、創造性が豊であったり、密度が低かったり、さまざまである。そしてこのひらめきこそが、芸術家にとっては、偉大な意味をもつもので、豊かな人間性と洗練された感覚を必要とするものである。しかしながら子どもたちは、そのようなヒューマニティや、芸術性を必要とするものでなく、

このひらめきの地盤は前述したような、なまなましい生活の実感である。発想の強弱はものごとや、行動との間にいかに強烈にイメージが結びついたかによって、その差が現われる。この結びつきは一人一人の子どもの個性によって異なるもので、松江市立白濁小学校の井戸原亮二氏は、7項をあげてそれぞれの発想のタイプを説明している。

- 1) 記述性のある知覚が主となるもの。
- 2) もの自分とのふれあいの中から生まれる心理的な動きや、感情が主となるもの。
- 3) 音や、音をともなった動きとしてとらえる感覚が主となるもの。
- 4) ものにふれようとする本来の欲求や、触れたときの感覚が主となるもの。
- 5) 自分なりにとらえたことがらに、夢や願いをこめたものが主となるもの。
- 6) 対面した空間や、ものの量、質からうける反応が主となるもの。
- 7) 自分のものとして手にとったり、ものを目の前にしたときの感覚が主となるもの。

発想から構想へ——発想と構想とは一環の流れとして扱われるもので、特に幼児にあっては、別々に切り離すことはできない。しかし前述したように、心の働きとしては、発想はひらめきであり、構想は内容を実現する方法などについて、考えをめぐらし組み立てることである。構想ということばは、美術用語としては、いろいろなところに出てくることばであるが、写生のように、対象と直接視覚的に結びついて、表現するような働きに対して成立することばである。構想の段階では、子どもたちが、それぞれ個性に応じてイメージをふくらませ、拡大深化させてゆく第二段階にあたるところで、除々にその子どもらしいペースに乗ってゆく段階である。

この段階で特に重要なことは、心のゆさぶりと共に、だんだんとイメージがたしかなものになり、抽象的であった想が定着してゆくことである。また、もう一つは、イメージの定着と共に、表現につながってゆく形が鮮明になってゆくことである。想の誘発——発想——構想と流れに従って活発に発言したり、会話も豊になり、たしかなイメージになったと思って、表現に導くと、意に反して低調な表現であつたりすることがある。これは構想の段階から描画に至る間の取扱いに問題があるので、かなり積極的な形が生まれるように注意する必要がある。以上のような過程を通して子どもたちは、描画活動をするのが普通であるが、勿論この流れは、指導者が一応のめやすとして心にとめるものであつて、時間的にも順序正しく、この通りの段階を経なければならないというものではない。題材の与え方や、子どもたちの活動の状態によって、そのつど臨機応変の指導がなされねばならない。

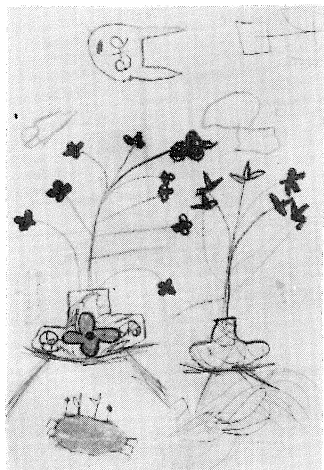
この本流とでも言うべき段階を、何回となく繰り返すことによって、ものの生命をたしかめ、ものへの愛情を深める域にまでもってゆくことが大切である。かつて生活画の先駆者として、全国に有名であった、島根県仁多郡馬木村の青木実三郎氏は、見るとは、愛情をもって生命、つまり魂を見ることだといっている。この言によれば、「描く前に村の自然や人事に親しませ、それを体験させ、それに魂をおくらせ、それからあふれるような詩や、美や、野趣といったよ

うなものに気づかせ、これを繰り返すことによつて、郷土馬木を理解し、親愛し、郷土愛を育てたい……云々」と実に昭和10年頃に青木氏は、地についた美術教育を実践した人であった。

2 よく見てかく

この領域はよく見てたしかめて描く項目で、大人の写生画の概念では誤解を招きやすい。子どもたちの見方は、触覚的であり、臭覚的であり、聴覚的であり、味覚的であつて、大人のように純粹視覚にたよるわけにゆかない。大正末期山本鼎氏が自由画論を提唱する以前は、大人のような見方を子どもに強要した為に、はなはだしく抵抗があつた。山本氏の自由画論以来子どもたちは、自然の中に開放され、子どもらしいものの見方が育つて来た。しかしながら、長い年月を経るにしたがつて、写生主義となり、子どもの心の中で育つた自由性が乏しくなつて来た。このことから幼児期に、ものをよく見てかかせることは、時代遅れの教育をしているような、錯覚をもつたものである。

見る、ということは、描くことへの基本であり、今まで見たことのないものは絶対に描けない。私たちは自然や人工物の中で、あらゆるものを見てよく知っているようであるが、案外知っていないのが普通である。タバコを吸う人はタバコ屋の看板はよく見えるにちがいないが、吸わない者にはよく見えない。まして子どもたちは、見る、という積極的な働きがないとよく見えない。「花をよく見てかきなさい。」といつても、どこをよく見るのかさっぱりわからない。なんとなく見るというのが一番特徴がなく、子どもと強いつながりをもつ条件ができるとよく見えるし、生き生きとした像を結ぶので不思議である。



第一図

第一図は2つの花瓶に花がさしてある絵のように見えるけれども、実は一つの花瓶がひっくり返つて水がこぼれ、それをまたもとの花瓶に花をさしたという、時間的継続が語られている。瞬間的に水がこぼれたその形が、実に生き生きとして、不思議な美しさをもっている。

このように強く子どもとの結びつきができると、その瞬間に、新鮮で子どもらしい形が生まれてくるのである。このことからして、当然見えるはずのものが、なかなか見えないというところに困難さがあり、「ものをよく見なさい」という前に、よく見える条件を工夫することが大切である。その見せ方に三通りある。

1) 集中的な見せ方をする。

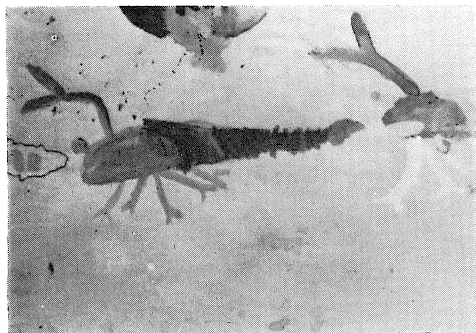
2) ものともとのかかわりあいによつて見させる。

3) かなり意図的なみせ方をする。

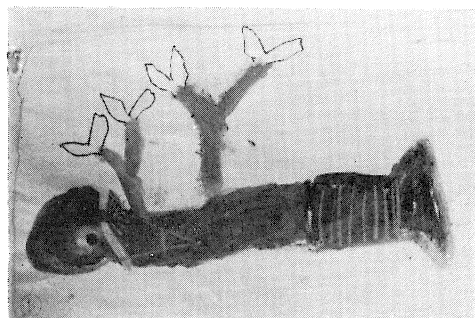
第二図は5才児が描いた作品で、ザリガニを水槽の中に入れ、ザリガニと遊びながら、集中的に観察させて、そのおどろきや、実感を素直に表現させた作品である。(妹尾輝雄氏提供)

図Aは女兒で服装などきちんとしていて清潔なかんじのする子であるが、園の生活は消極的である。そんな子どもの生活を反映して、ザリガニが装飾的に描かれ、はさみも昆虫の触覚のようによわよわしい。

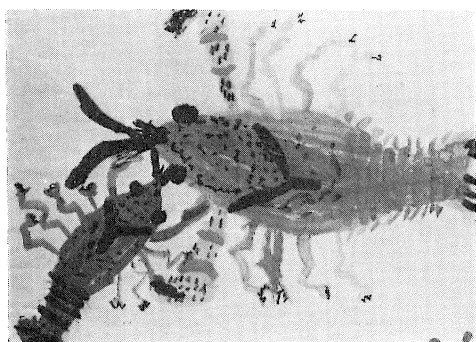
第 二 図



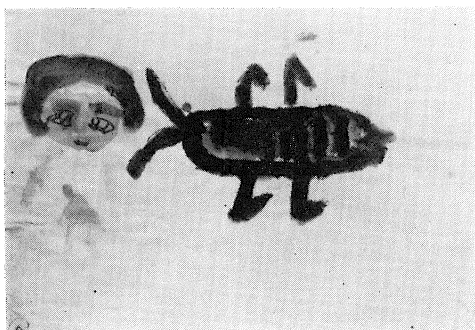
(A)



(B)



(C)



(D)

図Bは男児が描いたもので、平素ザリガニを取ったりして、よく知っているし、また、指をはさまれた経験もある。ザリガニを見て一番集中的になるのは、あの威力をもったはさみである。このはさみが大きく力強く描かれ、他の足は、はぶかれているところなど、かえって生き生きとした実感がうかがえる。

図Cはしっかりしている子どもで、自分の身のまわりの処理や、きまりはきちんと守れる子どもである。観察力もたいへんよくゆきとどいて、よくまとまった作品である。ザリガニの足の関節がまちがいなく描かれているところなど、この期の子どもにとっては珍しいことである。

図Dは都会から移住してきた女兒で、ザリガニははじめて見る生物である。ザリガニの習性や、はさみの威力がわからないので、ザリガニが蛾のようにおとなしく描いてある。

以上4枚の作品からわかることは、集中的な見方のなかにも、平素の子どもたちのくらしや、無意識のうちに溶けこんでいるものが土台となって、ものが見えるということである。

2) ものともとのかかわりあいによって見させる。

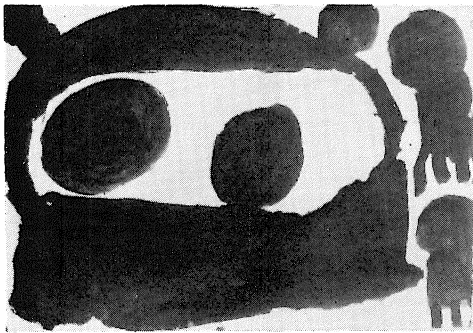
幼児の表現活動は、楽しい雰囲気や、描画材料を与えると、自発的に行なわれるのが普通で

あるが、その中には、いつも同じ題材や、描き馴れたもの、いわゆる概念化された、形式表現がある。

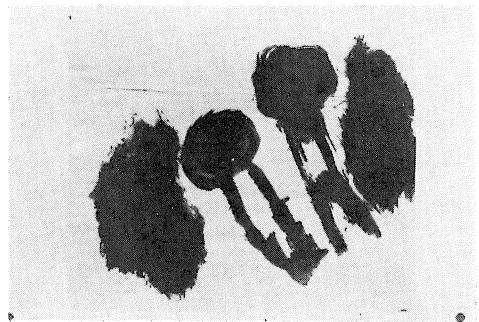
前述したように、ものとのつながりや、かかわりあいと密接でなく、空転するところに問題があるので、ものや、ものごとに直接接触させ、心の中に育ったことを表現させるように導く。

第三図はでんでん虫を現場に取りにいき、園で飼育しながら、よく見たり、さわったりして表現させた作品である。どの作品も墨一色で描かれているが、その時のおどろきや、感激がよく現われている。

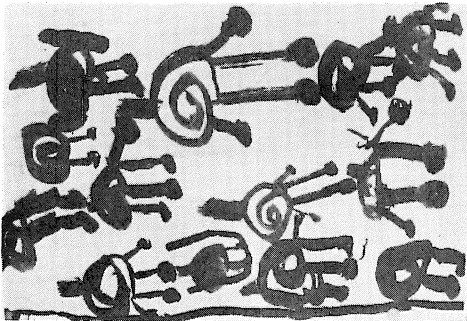
第三図



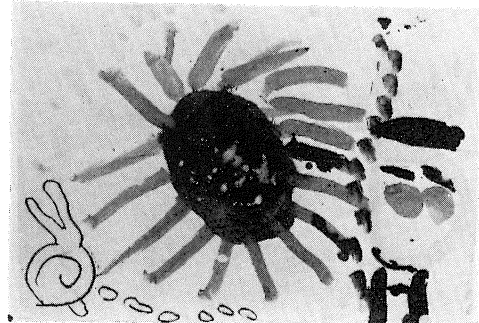
(A)



(B)



(C)



(D)

図Aは、今まででんでん虫を頭の中で概念としては知っていたが、実物をよく見たことがなかった。いろいろ遊んでいるうちに、でんでん虫のつもの不思議さに引かれ、それを大きく表現したものである。

図BはAと同じように、部分的なつものに興味をもち、さわってみたらぬるぬるして気持ちが悪かったことを、画面の一部を黒くぬるることによって、そのかんじを単的に表現している。

図Cは、でんでん虫を画面の中にたくさん描いて、自分と同じ生活経験を描いている。おとうさん、おかあさん、お兄さん、あかちゃんなどが、なかよくピクニックに行くところである。途中でピストルを持ったおまわりさんも描き、だんだん話題が発展していく夢の多い作品である。

図Dは でんでん虫を取りにいったが、たいへんよいお天気で、暑くてたまらなかつたとい

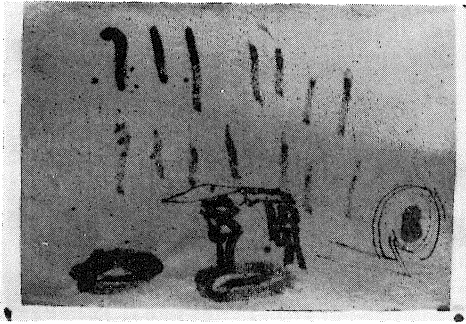
う自分の気持を表現したものである。画面の真中に、大きく太陽を描き、自分とでんでん虫は、片隅に追いやっているところなど、子どもらし作品である。

以上のことからわかることは、Aのように部分的なおどろきであつたり、Bのように触覚的なかんじから発展したものであつたり、Cのように自分の経験をかたつむりになぞらえたり、Dのように、やりきれなかつた感情を卒直に表現したり、ものを実感としてとらえても、子どもによって、ものとのつながりかたや、想の広がりが違うということである。

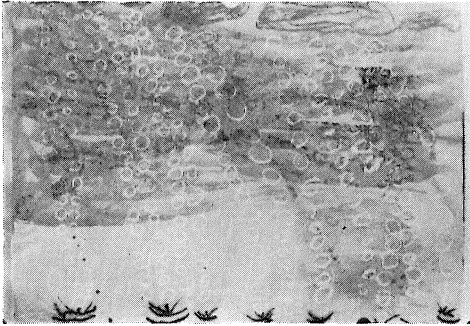
第四図は「雨降り」という題材で描いた作品である。

雨降りは子どもたちにとって、身近な興味を引くことがらである。水たまりで遊んだり、傘をさして園庭を走つたりして、じかに雨に触れさせ、その時の気持を水彩で表現させたものである。

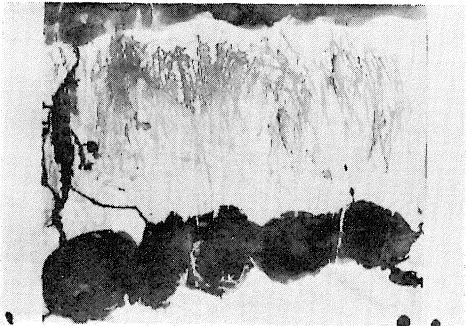
第四図 雨 降 り



(A)

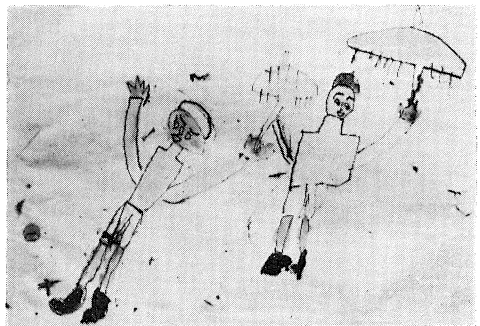
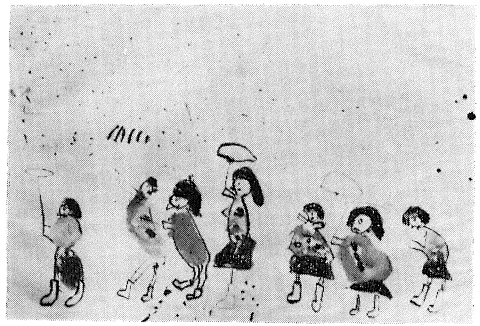


(B)



(C)

第五図 雨 降 り



第四図 (A)

雨降り子どもたちにとって、身近な現象ではあるが、必ずしも嬉しい感情をもつ子どもだけではない。この作品は、雨が降ってなんとなく気持ちが沈んでいく、自分の心の淋しさをうつたえたもので、よわよわしい線で描き、いやな水たまりや、傘をもつた子どもの姿勢等が、そのかんじをよく表現している。

第四図 (B)

雨が降ってくる空を見あげると、あとからあとから降ってくる不思議な雨、大空にはビニールの袋のようなものがあって、そこから雨が落ちてくるのだろうかという、子どもの想像で描かれた作品である。下部の黒色ではつきりわかる形は、地面に雨つぶが落ちてパッとはねた形で、この形が生き生きとして画面全体をひきしめている。

第四図 (C)

高い空から次から次へと、細い雨が降ってくる。「よようど線香花火のようだ。」という子どもの幻想表現が実に美しい。また水たまりは、自分たちの影を写す鏡のようであり、広がっていく波紋はおもしろい、そんな子どもらしい夢のある作品である。

次にあげている第五図の作品は、第四図と同じように、雨とのかかわりあいによって描かせた絵であるが、園と指導者が異なる。(妹尾輝雄氏提供)

第四図の作品と比較してみると両者の違いがよくわかる。

第四図の場合は、遠い不可思議なところから降ってくる雨という、心の中に染みるような神秘性を強調して、主題を扱っている。

第五図は、雨の中でジャブジャブと遊んだ子どもの喜びが、直接表面に出て、力強い人物の姿勢となって表現されている。このことからして、主体はあくまでも子どものかかわりあいであるが、指導者の意図がその媒介として、このようにはつきりと現われることを知る必要がある。

3) かなり意図的な見せ方をする。

ある漁村の保育園で、魚に関係のある絵を見たことがある。その魚の形がありきたりの∞字形式で、生きた魚の実感がなく、不思議に思った。この魚村は、殆どがなにらかのかたちで漁業に関係があり、魚とは縁の切れない存在である。この環境の中でくらしている子どもたちの絵が、形式的になるのはおかしいと思うのだが、結局よく知っているということと、よく見ているということは違うということである。そこで指導者のアイデアや、工夫によって、かなり意図的に見せる必要がある。

① 虫めがね、顕微鏡を使って見る。

魚のうろこ一枚をとって虫めがねで見ると、不思議な美しさがあることに気づく。このように一枚のうろこでもこんなに美しいのだから、もつと気をつけて魚を見よう。とか、また、これ以上の美しい着物を作ろう等、造形遊びにまでたかめていくことは容易である。

また、蝶のこな、花粉、植物の断面等、数限りなくあり、自然のもつ組織体の美しさに触れさせることができる。

② 瞬間的にものを見せる。

見るという働きには、長時間にわたって細部まで見ていくのと、短時間に概観や、ものの特徴を把握する見方がある。子どもたちは、どちらかというところ、短時間にそのもののだいたいの形を把握している場合が多い。この働きを利用して、今まであまり見たことのない花（植物）果物、昆虫など瞬間的に見せる方法である。花瓶がひっくりかえったために、いつそう花瓶の模様が生き生きと見えだしたのもその一例である。

3 おはなしをかく。

子どもたちは、お話や物語りはたいへん興味をもって聞き、その中に自己を没入させて、それぞれにイメージをふくらませているのが普通である。その場合に、よく知っている物語りや、何回となく聞かされたお話は、イメージとして育っていく情景よりは、既製の形体が強く押し込まれ、子どもの柔軟な世界が表現されにくいので、何を選ぶかは大切な要因となる。といて、あまりにも文学性が高くて、話の筋道や、情景が理解しにくいような物語りも抵抗がある。前述したように、同じ物語りや、お話を聞いても、それぞれに子どもたちの生活経験によってイメージの育て方がちがってくる。そのために今まで経験したり、見たことのないことは形となって浮かばないので、心の中で育てたイメージと、表現としての形とは、かなり開きがある。

イメージはデリケートなもので、ちょっとしたことで、鮮明になったりぼけたりするもので、その扱いには慎重さが必要である。

お話の絵では、【想の誘発】は話を聞かせることであり、【くらしをかく】領域と比べると、導入は手数がかからない。このために、一時お話の絵が、描画の題材として、よく使用されたものである。

実際には、話を聞かせてから、描画表現に入るとそのつながりが困難で、「さあかきましよう」といっても、なかなか表現してくれないことがよくある。これはお話を聞いて想がだんだんふくらんでいるけれども、イメージのたしかさと同時に、描画表現への具体的な形が、できにくいことで、指導者はこのつながりを大切にすべきである。

お話を聞かせる方法には、指導者が直接はなして聞かせる。録音テープを再生して聞かせる。現場の雰囲気再現できるように、音や声をテープにとって、お話のバックに使う。既製のソノシートを使う。……等、いづれにしても、お話や、テープから直接表現に導かないで、指導者と子どもとの会話によって、想の拡大深化をはからねばならない。

おはなしをかく領域2項について

1) 物語り 童話といった文学性のあるお話をかく。

- ・全文を聞かせ、よくその話の内容をわからせ、興味をもった場面を自由に表現

させる。

- ・あらかじめ、絵になりそうな場面を指導者が設定して、話し合いによってその場面に導入していく。
- ・文章の内容が、もりあがったところで話をやめ、「これからどうなったでしょう」で終わり、？のところを表現させる。
- ・お話にはなかった場面の、情景や空間を特に重点的に表現させる。

2) 子どもが興味を呼びそうなお話をかく。

- ・子どもが描画表現しやすいように、お話をつくって聞かせる。
- ・子どもたちがつくったお話を聞かせる。
- ・一枚の絵を見ながらはなして聞かせる。(もとなる絵は子どもには見せないではなす。)

4. 夢 空想をかく

この領域には2項がある。

- 1) 見ることからだんだんと空想の世界に発展する場合。
- 2) 子どもらしい幻想から発展する場合。

夢、空想の世界は、望ましい未来に向けられた、自主的な想像の過程であって、大人には想像のつかない、子ども独特の世界である。

しかしながら、現代文明の影響をうけて、子ども自体の生活が一般化し、合理性が先行するようになって、素朴な夢が薄らいでいることは、前述した通りである。

西田秀雄氏の「児童画の指導技術」という著書の中で、一人の教師が子どもに質問したことがら、興味をひいた。「これから西へ西へずつと西へいったらどこへいくのでしょうか。」子どもたちは変わった質問に、ちょっと当惑ぎみである。一人の子どもが「それは海に出ます。」「そうだね。海に出るね。それをもつともつと西へ行ったらどこへ出るだろう。」「海のずつと向こうには、自分たちの知らない不思議なところがあるかもしれない。」「いや、恐い国かもしれない。」等と子どもながらに、そのおもいがふくらんでいく。先生はきつと大人が想像できないような答えが、どんどん出てくることを予想しながら、子どもの顔色をうかがっている。と一人の子どもが立って、「先生それはまたこの場所にかえってくるよ。地球はまるいから」と得得として答えた。この答えに先生も子どもも、一瞬自分の足の裏を見せつけられたかんじであった。と

その答えは、理論的であるし、科学の進んでいる現時代に、ふさわしい推理の仕方であるに違いないが、その反面、子どもたちの心の中に育ってもらいたい夢が、音をたててくずれ去っていく淋しさを感じる。

現代文明と逆行するわけにはいかないが、人類発展の歴史を見てもわかるように、子どもの

成長過程もこれに似た段階を通過していくものであろう。幼児期という特殊なこの時点に立つて、無限に広がっていく夢、空想を大切にしたいものである。

5 きもちのたかぶりをかく（特殊な表現）

この領域は、子どもが突然に、気持のたかぶりを描く特殊な領域で、指導者が予想して描かせる方法ではない。描画表現の際、描き進むに従って、だんだんと感情がたかぶり、表現しようと思わなかったことが、瞬間的に形となって画面にとび出すことである。このようなできごととは、注意して子どもを見ていると、よくあることで、その原因を理解する必要がある。

第六図Aは幼稚園の年長組である。ある日お姉さんの勉強室を描くといって、パスで描きはじめた。画面の中には、新しい机、本箱が描かれ、窓にはカーテンが吊してあって、色彩もにぎやかである。だんだんと画面の中に話題が多くなったころ、突然「こんな勉強室なんだ！」と大声を出して、黒く塗りつぶしてしまった。描き終わってからA児に聞いてみると、それなりに理由があることがわかった。



第六図 (A)

A児の姉は小学校3年生で、この間立派な勉強室を造ってもらったが、A児はまだ幼稚園なので、造ってもらえなかった。姉の部屋に入ると、新しい机や本箱が目にとまって、うらやましくてしかたがない。そんな気持が、心の底に無意識のうちに埋って、描いているうちに、一気に爆発したのがこの作品である。このことを両親に話したら、子どもの心がそのように、描画に影響を与えるものかと、

驚いておられたが、姉の部屋にA児の机を置くことで、この問題は解決したようである。また、このように自分の不満や、いきどおりを画面の中に叩きつけることによって、情緒が安定していくものである。

第六図Bは、お家の中で楽しくテレビを見ているところを描こうとしたものである。家の中を透視的に描き、空の色をつけようとした時、突然「雷がおちた」という声と共に、いわずまでもらうか、黄色いえのぐがすばやく描きこまれた。その筆勢がいきいきしている、実感のあるタッチとなっている。

これはよい方向に発展する例であるが、逆に不健康なおぼけが出たり、不気味な絵に発



(B)

展する場合がある。いずれにせよ、よく家庭と連絡をとり、その原因をたしかめると共に、描かせることによって、情緒の安定をはかることが大切である。

III 結 び

以上5領域にわたって、指導上の問題点を検討してきたが、指導者の主体性が、前に出すぎた感がないでもない。しかし、自由の名のもとに、放任されがちな描画活動を、子どもへの勇気づけと、指導者の工夫によって、一歩前進させたいという願いが強いからである。

戦後「幼児の描画活動が萎縮しているのは、大人の悪い概念や、社会的な悪影響をうけて、概念的になり、子どもたち本来の描画活動が抑圧されているからである。」といわれてきた。この抑圧から解放してやれば、子どもたちは自由に表現するものであるという、主張のもとに、現場では概念砕きと呼ばれ、いろいろ実践が試みられた。その後時代の推移とともに、マスコミの影響や、合理的社会性によって、子どもたちのくらしそのものも、大きく変わってきた。この急流の中で、素朴な感動をどのようにして育てるかは、実に困難な問題ではあるが、教育の場では、これを避けて通るわけにはいかない。指導者みずからの行動によって思考し、愛情をもって、明日への偉大な勇気づけを行ないたいものである。